

■特別座談会

みんなで考えよう若者のオーバードーズ対策

——「ダメ。ゼッタイ。」の先にある、若者たちの SOS

福岡県立精神医療センター太宰府病院 精神科医師(収録時)

うえむらメンタルサポート診療所 医師

宇佐美貴士

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部

依存性薬物研究室室長

富山健一

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部

科研費研究員

喜多村真紀

《司会》国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部

心理社会研究室長

嶋根 卓也

本座談会は、「みんなで考えよう若者のオーバードーズ対策」というテーマで、行われました。

ご出席いただいた先生方は、福岡県立精神医療センター太宰府病院 精神科医師(収録時)、うえむらメンタルサポート診療所 医師の宇佐美 貴士 先生、国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 依存性薬物研究室室長の富山 健一 先生、そして国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 科研費研究員の喜多村 真紀 先生、司会は国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部 心理社会研究室長の嶋根 卓也 先生でした。

司会の嶋根先生が最初に企画の趣旨を、「近年、薬物依存症に関する質的な変化があります。これまでは薬物依存症と言いますと、覚醒剤などの違法薬物の問題を抱える患者が中心でした。しかし、覚醒剤の患者さんは年々高齢化しており、全体としては減少傾向にあります。その一方で、今、精神科医療で中心となっているのが、処方薬や市販薬といった、違法薬物ではない医薬品のオーバードーズを繰り返し、依存症となる患者さんの存在です。これまでの覚醒剤の患者さんは中年の男性が多かったのですが、オーバードーズ系の患者さんは、若年の女性が中心となっています。特に 10 代の若い方となると、咳止めや風邪薬といった、ドラッグストアで気軽に買えるような市販薬による問題が増えています。また、この問題は、薬物乱用の問題にとどまらず、自殺や自傷といったメンタルヘルス全体に大きく関わっているという特徴があります。これまで日本では薬物乱用は『ダメ。ゼッタイ。』というメッセージで、違法な薬物を使わせないことを強調した対策が取られてきていました。しかし、『使っても捕まらない』医薬品のオーバードーズが中心となり、これまでと同じような対策ではうまくいかなくなっています。今日はこの問題に対して様々な立場、様々な角度から話し合っていきたいと思っています。本日の参加者は、厚生労働科学研究で実施している市販薬の乱用・依存に関する研究班のメンバーで構成されています。

では、ご参加いただく先生方から、それぞれ自己紹介を兼ねて、普段どういことをされているのか、またこの研究班の中でどんな研究を行っているのか、今日の意気込みや今の気分も含めてご発言をお願いしたいと思います」と話され、座談会は始まりました。

続いて、「市販薬をオーバードーズする若者の臨床的特徴」「SNS とオーバードーズとの関係」「基礎から見た市販薬オーバードーズの危険性」「市販薬の販売制度の現状と課題」「依存症治

療・支援の現状と課題」「今後必要な対策や連携協力とは」と、座談会のテーマ「みんなで考えよう若者のオーバードーズ対策」に沿いつつ進み、宇佐美先生、富山先生、喜多村先生、そして嶋根先生の4先生方のあいだで、活発な議論を行っていただきました。

最後に、司会の嶋根先生が、「今回、若者に私がフォーカスを絞った一つの理由は、日本の10代の自殺者数が止まらないことが背景にあります。男女で見ると、女子は右肩上がりで上がっていて、男子も緩く横ばい、もしくは少し上がっているぐらいです。冷静に考えてみますと、子供の数は非常に減ってきています。自殺者数も減っていいはずですが、そうならない状況が続いているということは、明らかに何かしら異常事態が起きているわけです。そこで、考えなければいけないのは、その渦中にいる子供たちに対するアプローチだけではありません。周りにいる大人たちが、何ができるかを考えることが大事です。大人がどうしたら子供たちのサインに気づけるのか。そして気づいたらどんなお節介を焼いていけるのかといったことが、今、我々大人に突きつけられている大きな課題なのではないかと思っています。継続して、こういったディスカッションが学会などでもできればいいなと思っています。今日はありがとうございました」と話され、座談会を締めくくられています。

「みんなで考えよう若者のオーバードーズ対策」のお話は、実地医家の先生方にご理解いただくために、とても参考となる非常に有意義な内容の座談会となっております。